

Part 1 世の中の隠れた真実について

藤 田 永 祐

公的生活はもちろん社会生活でも、普段の暮らしでは口にしない、暗黙裡の申し合わせみたいなものがあって話題にしない、口にしない、しかし実際は口外されていることより、大きな意味合いを本当はもっていたりする。

文学作品には、あとあとまで妙に印象に残る章句に出くわす作品がある。そしてその章句やその章句が収まる一連の文章が、歳月を経るとともに、より深い味わいを帯びてくる。メルヴィルの『白鯨』は私にとってそういう作品である。

23章「風下の岸」はバルキントンという船乗りに関する短い章だが、その中のひと件、

あの身も凍える冬の夜、ピークオド号が復讐に燃える舳^{へさき}を冷酷凶暴な海原に進めたとき、その舵^{かじ}の前に立っていたのはバルキントンであった。危険に満ちた四年の航海から冬のさなかに戻ったばかりで、一休みすらせずさらに乱暴な航海に乗り出したこの男を、私は共感と畏怖の念をもって眺める。陸の上では彼の足は焼けてくるのだ。もっとも驚異に満ちたことは、常に語られぬ。深い思い出は墓碑銘をもたぬ。この短い章はバルキンントンの紙の墓である。彼の場合は風下の陸地に吹きつけられまいとして、嵐に揉まれながら彷徨^{ほうこう}する舟と同じだと言うよりほかない。港は喜んで救いの手を伸ばす。港は慈悲深い。港には安全、安楽、憩い、温かい毛布、友達と、すべて私たち弱い人間に優しいものがある。だがその嵐の中では、港、陸、そのものが船にとっては危害なのだ。すべての親切なものでなしをふり切って逃げなければならない。岸に少しでも触れるだけで、た

とえ竜骨をかすめるだけでも船全体に戦慄が走るのだ。あらん限りの帆を張ってひたすら沖へ、故郷へ送りとどけてくれようとする風に逆らい、水ばかりがのたうつ海原へと憧れ、世を逃れようと、身一つで危害の海へ突入する。友こそがもっとも恐ろしい仇敵^{きゅうてき}なのだ。

分かるだろうな、バルキントン。この致命的な、耐えがたい真理の片影を垣間見ることはできるだろうな。すべての深く真剣な思想とは、魂がおのれの荒漠たる海原の独立を守ろうとする大胆不敵な努力をしつつ、天地間のあらゆる凶暴な風がその魂を虚偽と卑屈の岸辺に叩きつけようとするのに抗することだということを¹。

『白鯨』独特の雄渾な文体である。この一文でメルヴィルの念頭にあるのは『白鯨』の船乗りたちの特殊な世界ではない。一般の世の中である。

「もっとも驚異に満ちたことは、常に語られぬ。深い思い出は墓碑銘をもたぬ」

「…友こそがもっとも恐ろしい仇敵^{きゅうてき}なのだ」「分かるだろうな、バルキントン。この致命的な、耐えがたい真理の片影を垣間見ることはできるだろうな。すべての深く真剣な思想とは、魂がおのれの荒漠たる海原の独立を守ろうとする大胆不敵な努力をしつつ、天地間のあらゆる凶暴な風がその魂を虚偽と卑屈の岸辺に叩きつけようとするのに抗することだということを」

逆説や警句に富み、漠然としていて、だが、世の中の隠れた真実^{てっけつ}を剔抉しているようで、一読して忘れがたい感銘を受ける人は少なくないだろう。

話を私たちの今現在の生活に関することに移したい。

先日 T 新聞のあるコラムに、その曜日担当の看護師がこんな話を載せていた²。

…ある時ベテランの男性精神科医が、入院中の患者から退院を求められた。それに対して医師は、「人間はみんな囚^{とら}われ人。自由になれないのはあなただけじゃない」。患者は返事をせず、いきなり医師を殴り倒したそう³だ。

もちろん、暴力は肯定しない。でも、患者が殴り倒した気持ちは、すご

くよくわかる。医師の言葉は一面で正しい。私たちは多かれ少なかれ、何かに囚われている。

…略…だが、閉鎖病棟から出られない患者と、医師の不自由は比べるまでもない。…略…私がこの患者に共感するのは、私自身も似たような経験があるからだ。女性差別について語ると、「つらいのは女性だけじゃない」と言い放つ男性がいる。…略…人権が守られない社会では、だれもが生きにくい。それでも特定の差別は存在する。性差別に対する私の怒りを勝手に相対化しないでほしい。

差別を許容する社会では、だれもが差別する側に回りうる。

生存競争は動・植物界の一つの基本原理で人間の世界も例外ではない。私たちは絶えざる競争の中に暮らしていて、いってみれば四六時中背伸びして生きているようなものだ。人間は弱い存在である。だからくつろぎを、慰安を求める。緊張からの、競争からの解放感、安堵感を求める。それは自然な欲求で少しも咎められるべき筋合いのものではない。だが、繰り返すが人は弱い存在である。そしてこの弱さは、甘え、^{ひが}僻み、嫉妬、偏見、果ては、差別、いじめ等々、人間性のマイナス面に容易につながるのである。

人は通常集団生活をしている。すると意識的、無意識的に周囲の人々を序列づけて、自分自身はなるべく上位に置こうとする。派閥や徒党を組んで仲間うちが得するように、なるべく快適に暮らせるように、陰に陽に画策する。好都合な口実を何かしら見つけて、条理に^{かな}適おうが適うまいが、利用して、生きがいや安心感を見出そうとする。

上述の逸話だが、女性差別について話されると「つらいのは女性だけじゃない」と口にする、ないし口にせずともそう思う男性は少なくないだろう。現状では多くの男性の普通の心理ではあるまいか。

女性全体、男性全体をひとくくりに集団としてみれば、「つらいのは女性だけじゃない」と洩らす男性は、(ややオーバーなようだが) 欲求不満の解消に集団としての差別意識を利用しているのである。世界経済フォーラムが世界各国の男女平等の度合いを数値化した「ジェンダーギャップ指数」の報告書によると、今年度(2023年度)の日本は、国別ランキングで対象146カ国中125位である。男女差別はそれぞれの国の国柄とか古来の伝統とか、理由づけは何かしらあっても、その裏に甘えの心理が潜んでいるのを否定できまい。そこに

は知性や教養は希薄にしか機能していない。

先の「人間はみんな囚われ人。自由になれないのはあなただけじゃない」という医師の言葉にも、フラストレーションの解消の要素があるだろう。ここには社会的上位者の下位者への侮り^{あなど}がある。驕り^{おこ}や侮り^{あなど}は自己満足の一種で、コンプレックスや欲求不満の解消法の一つである。また人権意識の低さの明瞭な証^{あかし}でもある。

先述のT新聞の同じコラムに、先の記事からおおよそ二十日後、その日のコラム担当の文芸評論家が以下の記事を載せた³、

LGBT 理解増進法案が衆院を通過した。昨年十月に発表されたあるショッキングな調査結果を思い出す。

認定NPO法人「ReBit（リビット）」が十二才～三十四才のLGBTの当事者を対象に行ったアンケート調査で、それによると、過去一年で自殺を考えたことがある人が十代で48%、二十代で40%。十代の場合、実際に自殺しようとした人が14%、自傷行為を経験した人も38%に及ぶ（小数点以下四捨五入）。

全国の意識調査と比較すると、十代の自殺念慮は三・八倍、自殺未遂は四・一倍。その一方で、セクシュアリティについて保護者に相談できないと答えた人は92%、教職員に相談できないと答えた学生は94%。いかに彼らが悩み、孤立しているかが浮かびあがる。…略…

デンマークとスウェーデンの研究者が共同で行った研究では、同性婚の成立後、同性愛者の自殺率が46%も減少したという結果も出ている（2019年）。…略…

LGBTの当事者たちがいかに苦悩しているかが良く分かる。当事者であるか否かは、当人の意志と関わりないから、責任とか責めも負う筋合のものではない。大多数の人々はLGBTの当事者ではないからこうした悩みと無縁だが、人々の差別意識が当事者たちに、いかに深刻な悩みになっているかが分かる。しかも通例だれにも言えず、相談相手もないのだ。

マイノリティであるがゆえに、マジョリティの偏見や差別・迫害の対象にな

る例は、LGBT のほかに世の中にいくらでもある。世界各地の少数民族問題一つとっても、枚挙にいとまがない。

現在マスコミを最もにぎわせているジャニーズ性加害問題も、少し広げて考慮すれば、その一つに入る。

普段の暮らしでは口にしないこと、暗黙裡の申し合わせみたいなもの（ジャニーズ性加害のケースでは、新たに就任した副社長が「何だか得体のしれない、それには触れてはいけない空気」と言ったもの）があって、話題にしない、口にしない、しかし口外されることより大きな意味合いを本当はもっている。

上述の記事から一つ分かることがある。それはデンマークやスウェーデンなど同性婚に、より寛容な国々は、そうでない国々より、セクシュアリティの問題に関しては「人々が口にしないこと、暗黙裡の申し合わせみたいなもの」に、より誠実な心の姿勢で対していて、知性と教養（飾り物・ひけらかしでない教養）がより機能していることである。

ところで甘えや偏見、差別意識はいうまでもなく、優越感、エリート意識そして派閥意識、さらには肩書や称号意識も、**努力、挑戦、創造**には不向きである、むしろそれらを中断させる。そして個人もグループも社会も、向上心、探求心、研究心が希薄なところに本当の改革や進歩・発展は望めない。それは生命の原理、生きていることの意義にも関わってくるのではないだろうか。人類そのものが太古の昔からさまざまな厳しい挑戦に直面してきて、難局一つ一つを辛うじて克服してきた歴史をもつに相違なく、今現在も温暖化の進行という切羽つまった、いや応なしの難題に直面しているのである。

私たちの生活の場で、マスメディア（テレビ、新聞雑誌、ポータルサイト）をとりあげても、教養を培い、さらには判断力や見識の涵養に資するようなものは比較的少ないと思う。たんに知識を増やす類のものは数多いが（ちなみに、暗記力を重視し、知識を増やすことを旨とするものは、既存の社会体制への適応力・順応力の育成に力点がある）。テレビ番組にしても、いわゆる教養番組は決して少なくないが、教養が遊びと乖離したかたちになると、視聴率は下がり、社会に及ぼす影響力は減じる。テレビは放映が開始された初期の頃の方が、老若男女を問わず楽しめて教養が培われるような番組は今より多かったと思う。

近年教養と娯楽性がうまくマッチしていて、大変好評を博している番組の一つに、民放のテレビ番組「プレバト」がある。以前にも触れたが（「英語の言葉遣いについて」(獨協大学『英語研究第 80 号』2019 年)）、大きな人気の要因の一つは、登場する各分野の師匠たちがいずれもその道の本当の権威者で、出演者も視聴者も大方が納得のいく解説をし、手本をいつでも示すことができることにあるだろう。この番組の教養性は主に感性や言葉のセンスを磨く点に存するが、遊びの中に教養が培われる類の番組が数少ないのもその人気に与っていると思う。そして「プレバト」には透明性、公平性、正当性が確保されている。

どんな肩書も称号も、それ相応の能力と実績を示すこと無しには、本当の権威に欠け、説得力もない。これは当人たちだけの問題ではなく、関係者たち、その弟子たちにも権威はない。肩書や称号は形式にすぎない。

Part 2 翻訳について

海外の文学作品の理解と鑑賞は、一般的に翻訳に頼らざるをえないのである。従って文明国であればどこでも翻訳業は決しておろそかにされてはいない。

アルベール ゲラルド (Albert Guerard) は名著『世界文学序説』(原著名 *Preface to World Literature*, 筑摩世界文学大系別巻 1、中野好夫訳 1970) の第一部、第二章 翻訳 欠くことのできない道具: 翻訳者の苦悩と栄光、において、翻訳の肝心かなめなことを簡潔にこう述べる、「その名に値する翻訳とはすべて解釈であり、注釈であり、批評である」(p24)。

英文を和文に直す場合を考えてみたい。第一に、二つの言語はシンタックスが大きく異なっている。いわゆる逐語訳(直訳)と呼ばれるものは、欧米人が英語の語彙と文脈と英語のセンスで記した英文を、その原文にできる限り沿って和文に直すことである、と表現できるだろう。いうまでもなく和文には和文の語彙と文脈と日本語のセンスがある。それを軽視して逐語訳すると、多くは読みにくい、ときに極めて読みにくい、ときに意味不明の文章になるのは少しも不思議ではない。シンタックスが大きく異なる以上、読みやすい自然な和文

Part 2 翻訳について

にするには、語彙も文脈も、原文の語彙や文脈に相当しないものを当てたり、章句や文章が解釈になったり注釈になったり、ときには批評のようなものになるのが理の当然なのである。

アルバール ゲラールは、同上書の第二章 翻訳 欠くことのできない道具：新しいホメロス、において、翻訳の利点を「原作にない唯一の利点は改訂できること」(p25)と指摘している。翻訳の利点をさらに考慮するなら、翻訳の本務は価値と意義と魅力を備えた海外の古典的な作品を、なしうる限り原作の魅力と意義を伝えること以外にないのだから、(欧米で当然視されているように)^{なにびと}何人でも試みることができるのも翻訳の利点といえよう。さらには、時の経過につれ精神風土が変わり、人々の言語感覚も変わるから、各時代の訳があつてしかるべきなのだ(例えばフランスでは、シェイクスピアはこれまでに数多くの翻訳がなされてきて、現在も新訳が出され続けている)。

以前にも触れたことだが(「英語の言葉遣いについて」(獨協大学『英語研究第80号』2019))、ある作品が、これまでに広く紹介され一般に知られているとしても、さらには大変評判になった時期があったとしても、その作品が良く理解されていることには必ずしもならない。原作の理解のされ方が中途半端とか粗っぱいと、読者はその作品に親しみを抱きにくくなり、正当な鑑賞も評価も難しくなるだろう。のみならず真の愛好家やファンも育ちにくくなると思われる。

数年前のことだが、友人に誘われてある読書会に所属していたことがあった。たまたまテキストとして使われていたのはアイリス・マードック(Iris Murdoch)の『ブラック・プリンス』(*The Black Prince*)であった。読書会の方式は、メンバーの一人ひとりがテキストの数ページ分を担当箇所として割り当てられ、その箇所を各自が自己流儀で解説・コメントしていくというものであった。以下は私が担当した箇所の試訳である。

The Black Prince ペンギン版 p.223 下から5行目から、p.225 上から2行目まで

The division of one day from the next must be one of the most profound peculiarities

of life on this planet. It is, on the whole, a merciful arrangement. We are not condemned to sustained flights of being, but are constantly refreshed by little holidays from ourselves. We are intermittent creatures, always falling to little ends and rising to little new beginnings.

既存訳

一日をその翌日と区分することはこの地上における生命の最も深淵なる特色の一つにちがいない。それは概して都合のいい取り決めである。われわれは持続的に躍動する存在として運命づけられているのではなく、絶えず自分自身からの短い休暇を取ることによって元気を回復している。われわれは断続性を有する生き物であり、いつでも小さな終りへと下降し、また新たに小さな始まりへと上昇する。

試訳

昨日、今日、明日と一日一日の区切りがあることは、この地球上の生活のもつ特殊性のもっとも深遠なものの一つにちがいない。それは全体として情け深い取り決めである。私たちは一貫性のある存在たることを強制されてはおらず、小さな休日が絶えずあることで元気づけられる。私たちは間歇的存在であって、何時もちよとした終りを迎え、新たな始まりに立ち向かっていく。

Our soon-tired consciousness is meted out in chapters, and that the world will soon look quite different tomorrow is, both for our comfort and our discomfort, usually true. How marvelously too night matches sleep, sweet image of it, so neatly apportioned to our need. Angels must wonder at these beings who fell so regularly out of awareness into a fantasm-infested dark. How our frail identities survive these chasms no philosopher has ever been able to explain.

既存訳

疲れやすい意識は幾つもの章に配分されている。そして、明日は世界が全く違って見えるだろうということは、自分にとって愉快だろうと不愉快

試訳

すぐに疲労を覚える私たちの意識は、区切りを与えられていて、明日になれば世界が今とはまるで異なっているということ、快いことで

快だろうと、一般には真実なのである、又夜はいかに不思議に眠りと調和することだろう。眠りは夜の快い象徴であり、われわれの必要に対し実に整然と割り当てられているのだ。かくも規則的に意識を失い幾多の幻想に満ちた闇の中へ入り込むこれらの存在に接し、天使は必ずや驚嘆するに違いない。わわれわれの虚弱なる本体が、いかにしてこれらの裂け目を超えて生き延べられるのか、これを説明し得た哲学者はまだ一人もいないのである。

あり、快くないことでもあるが、通常真実である。夜は素晴らしく睡眠にマッチしていて、夜の甘美なイメージは、なんと巧みに私たちの必要に応じて配分されていることだろう。規則正しく意識を失い、幻想が横行する闇へ入っていく人間という存在を、天使も讃嘆するに相違ない。か弱い私たち人間が、こうした裂け目をいかにして生き延びていけるのかを説明できた哲学者は誰もいない。

The next morning - it was another sunny day- I woke early to an exact perception of my state; yet knowing too that something had changed. I was not quite as I had been the day before. I lay feeling myself, as someone after an accident might test himself for broken limbs. I certainly still felt very happy, with that curious sense of the face as waxen, dissolving into bliss, the eyes swimming with it. Desire, still cosmic, was perhaps more like physical pain, like something one could die of quite privately in a corner. But I was not dismayed . I got up and shaved and dressed with care and looked at my new face in the mirror. I looked so young it was almost uncanny. Then I drank a little tea and went to sit in the sitting-room, with my hands folded, looking through the window at the wall. I sat as still as a Buddhist and experienced myself.

既存訳

翌朝——それはまたも好天気の日だったが——僕は早々と目を覚まして自分の精神状態を正確に感知した。だがまた、何かが変化したことも知っていた。自分が前の日とまったく同じではないのである。事故に

試訳

翌朝——この日も晴天であった——早朝に目覚めると、心身の状態を正確に知覚した。何事かが変わっていることも知った。前日の私と同一ではなかった。ちょうど人が事故のあと手足が折れていないか試そう

遭った人が、怪我はなかったかと躰を点検するように、僕は横になったまま体じゅうの点検を行った。たしかにまだ大きな幸福感が残っており、顔は蠟で出来ているような例の奇妙な感覚を伴い、それが溶解して無上の至福となり、そのために目の眩むような思いがする。いまだに宇宙のごとく廣大無辺な欲望は、あるいは以前よりも肉体的苦痛に似ているかもしれない。その苦痛が原因で、まったくひっそりと片隅で死んでしまうこともあり得るかもしれないのだ。しかし僕は慌てなかった。起きて髭を剃り、入念に服を着ると、鏡に映った自分の新しい顔を眺めた。われながら非常に若々しく見えて不思議と言ってもいいほどだった。それからお茶を少し飲み、居間に行って腰をおろし、手を組合せたまま、窓から外の壁を見つめていた。僕は仏教徒のように静座し、自分自身を経験した。

に、自分自身をあれこれ点検しつつ、横たわっていた。依然として確かにとても幸せだった、顔は蠟のようなあの奇妙な感覚、至福のうちに溶けてゆき、眼は至福に浸っているようだった。欲望は依然として宇宙的であつたが、肉体的苦痛に似ていた、（言い換えると）人がそのために片隅でひっそりと死ぬことができるものに似ていた。しかし私は狼狽しなかった。起床し、髭をそり、慎重に衣服を身につけ、鏡に映った自分の顔を見た。とても若く見えて、ほとんど気味が悪いくらいだった。それからお茶を少し飲んで、居間に行き腰をおろし、腕組みして窓越しに壁を見つめた。仏教徒のように静座しながら、黙考した。[experience oneself の直訳は「自己経験する」でよく分からない。具体的には次に続くパラグラフの内容を指している。従って「自己省察する」くらいの意と察せられる]

After the initial revelation, love does demand a strategy: that this is often the - beginning of the end makes it no less imperative. I knew that today, and presumably every other day forever, I would have to busy myself concerning Julian. Yesterday this had not seemed so precisely necessary Yesterday what had happened was simply that, through no merit of my own, I had become virtuous. And yesterday that had been enough. I loved, and the joy of love made a void in me where my self had been. I was purged of resentment and of hate, purged of all the mean anxious fears that compose the vile ego. It was enough that she existed and that she could never been mine. I had to

live and love alone, and the sense that I could do so had almost made me a god. Today I was no less virtuous, no more illusioned, but my will was just a trifle busier and fussier. Of course I could never tell her, of course silence and work would felicitously absorb the great power with which I was endowed. But all the same I felt a new need for some rather more localized Julian-directed activity.

既存訳

その最初の啓示があった後、たしかに愛は戦術を必要とする——それが往々にして終局の始まりであるということは、その戦術の絶対的必要性をいささかも減じるものではない。今日、そしておそらく今後は来る日も来る日も、自分がジュリアンのことで忙殺されねばならないのは判っていた。だが昨日は、これがそれほど確かな必然性を持つものとは見えなかった。昨日起こったことといえ、自分自身の真価とはおよそ無関係に、自分が高潔になったということだけだった。しかも昨日はそれで十分だったのだ。僕は恋をし、その恋の歓びは、僕の自己が存在していた心の内部に空白を作ったのだ。分の心から恨みや憎しみが一掃された。下劣な自我を構成するけちくさい不安に満ちた恐れが、すべて一掃されたのである。彼女が存在するだけで十分だったし、彼女が決して僕のものたり得ずとも十分だった。自分はただ一人で生きて愛さねばならないのだ。そして、自分はそれをなし得

試訳

愛は最初に(愛しているのを)はっと分かったあとは策を要する。それがしばしば終わりの始まりであることは、策を必須とするということなのだ。今日、そしておそらく一日おきにいつまでもジュリアンのことで忙殺されねばならないだろうことが分かっていた。昨日は正確にいてそんな必要とは思えなかった。昨日は、自分に起こったことは私の長所を通してではなく、ただ立派に振舞えるようになっていただけのことで、昨日はそれで十分だった。私は人を愛した、その愛の喜びが私の内に空虚をつくり、そこに私の自我は居座っていた。私の内から憤りも憎しみもと除かれ、卑しい自我を構成するすべてのつまらぬせわしない恐れもと除かれた。ジュリアンが存在し、決して私のものにならない、それで十分だった。私は一人で生活し、一人で愛していかなければならないが、それが自分にできるという意識が私をしてほとんど神のような存在たらしめた。今日も私は同様に立派

るのだという意識が、僕を神にも似た存在にしていたのである。だが今日は高潔さが減ったわけでも、妄想が増したわけでもないのに、自分の願望が昨日よりほんの少し忙しくて落ち着きを失っていた。もちろん決して彼女に心を打ち明けることはできない。もちろん沈黙と仕事とが、僕に賦与されている大きな力をうまく吸収してくれるだろう。しかし、それでもなお、僕はもっとジュリアに向けて集中された活動が新たに必要を感じていた。

に振舞い、もはやイリュージョンを持っていないが、私の意志はほんの少しだけせわしく神経質になっていた。もちろん私は彼女に話すことはできない。私に授けられた大きな活力は幸い沈黙と仕事の内に費やされるだろう。だがともかく、何かもつとジュリアンに向けた活動をする必要性を新たに覚えた。

[I had become virtuous. の 'virtuous' は英和辞書に「有徳の」とあり、そのまま訳すと「私は有徳になっていた」で、意味が通じない。OALD には behaving in a very good and moral way とあり、意の通じる和訳ができる]

The Black Prince ペンギン版 p.230 上から 8 行目から、p.231 上から 18 行目まで

The restaurant at the top of the Post Office Tower revolves very slowly. Slow as a dial hand. Majestic trope of lion-blunting time.

How swiftly did it move that night while London crept behind the beloved head? Was it quite immobile, made still by thought, a mere fantasy of motion in a world beyond duration? Or was it spinning like a top, whirling away into invisibility, and pinning me against the outer wall, kitten-limbed and crucified by centrifugal force?

Concerning absence love has always been eloquent. The subject admits of an explicit melancholy, though doubtless there are certain pains which cannot be fully rendered.

But has it ever sufficiently hymned presence? Can it do so? The presence of the loved one is perhaps always accompanied by anxiety. Mortals must tremble, where angels might enjoy. But this one grain of darkness cannot be accounted a blemish. It graces the present moment with a kind of violence which makes an ecstasy of time.

既存訳

郵政省タワーの天辺にあるレストランは非常にゆっくり回転している。時計の針のようにゆっくりと。獅子の爪を擦り減らす時間[シェイクスピアの「ソネット」19を参照]という壮大なる譬喩。

その夜、愛しい人の頭の向こうをロンドンが移転してゆく間、それはどんなスピードで回転していたのだろうか？思考によって停止させられて完全に不動のものとなり、持続の及ばぬ世界における単なる運動の幻にすぎなかったのだろうか？それとも独楽のように目にも見えぬ速さで急回転し、遠心力によって僕を周囲の壁に、仔猫のように無力な姿で磔にしていたのだろうか？

不在ということに関し、愛はこれまで常に雄弁に語ってきた。この主題は明白なるメランコリーの余地を残している。もっとも、明らかにそこには十分に表現することのできぬ何らかの苦痛があるのだが。しかし、今だかつて愛が十分に存在を賛美したことがあっただろうか？はたしてそれは可能なのか？愛する人の存在は、おそらく常に不安を伴っているのではないか。天使ならば楽しむであろうところを、人間は震え戦かねばならないのだ。しかし、このほんの僅かな闇を欠陥と考えることはで

試訳

郵政省タワーの最上階にあるレストランは非常にゆっくりと回転している。日時計の針のようにゆっくりと。ロンドンの街が愛する人の背後にゆっくり動いていたあの夜、それはどのくらいの速さで動いていたのだろうか。まったく動かずにいたのだろうか。もの思いにより、静止し、時を超えた世界にいて、単に動いているような幻想を持ったにすぎないのだろうか。それともコマのように旋回し、目に見えぬほど速く回っていて、私は外の壁に串刺しになり、遠心力によって子猫の手足のようにはりつけにされていたのだろうか。

離れている愛に関してこれまで雄弁に語られてきた。離れている愛には明らかにもの悲しさが伴う余地があるとはいえ、完全に言い表すことができないある種の苦痛があるのも疑いない。離れている愛は十分に讃えられたことがあっただろうか。また、そんなことができるだろうか。愛する人がいることは、おそらく常に不安が伴う。天使ならたんに楽しんでるところを、人間は身震いを覚えていなければならない。だが、この闇の一粒とも言うべきものは欠点とは言えない。それは時として恍惚たらしめる一種の暴力によって、今現在に光彩を添えてくれるからだ。

きない。それは恍惚の時を作りだす
一種の烈しさにより、現在の瞬間を
飾っているのである。

[上から二行目の一文は調べがつ
かず未詳のため空白にした]

To speak more crudely, what I experience that evening on the Post Office Tower was a kind of blinding joy. It was as if stars were exploding in front of my eyes so that I literally could not see. Breathing was fast and difficult, not unpleasant. I was conscious of a certain satisfaction in being able to go on pumping myself full of oxygen. A quiet and perhaps outwardly imperceptible shuddering possessed my whole frame. My hands vibrated, my legs ached and throbbed, my knees were in the condition described by the Greek poetess. This dereglement was completed by a sense of giddiness produced by the sheer conception of being so high above the ground and yet still connected to it. Giddiness of this kind in any case locates itself in the genitals.

既存訳

もっとあからさまに言えば、あの
晩、郵政省タワーの上で僕が経験し
たものは、目の眩^{くら}むような一種の歓
びだったのだ。まるで星が目の前で
炸裂していて、そのために文字通り
目が見えなくなってしまったかのよ
うだった。呼吸するのが忙しくなっ
て骨が折れるのだが、不愉快という
のではない。自分の体内に酸素を
いっぱい送り込めるということに、
僕はある種の満足感を覚えていたの
である。穏やかな、おそらく外か
らは見えない震えが、僕の軀全体を
捉えているのだった。手がわななき、
足は疼^{うず}いてぴくぴく動き、膝はあの
ギリシアの女流詩人によって叙述さ
れている状態にあった。地上はるか

試訳

もっと粗っぽい言い方をすれば、
あの夕べ郵政省タワーで私が経験し
たものは一種盲目的な喜びであった。
それはあたかも星々が目の前で爆発
していて、文字通り私は目が見えな
かった。呼吸は速くなり苦しくも
あったが、楽しくないことはなかつ
た。酸素を十分に吸いこみ続けられ
ることに私はある種の満足を覚えて
いた。はた目にはおそらく分からぬ
静かな震えが私の体全体を領してい
た。手は震え、脚は痛みを覚えて脈
打ち、両膝はあのギリシアの女流詩
人が描写した状態にあった。地面か
らとても高いところにいて、それで
も地面とつながっているという意識
から生じる目まいの感覚により、こ

な場所にいながらも依然として大地と連結されているという、純然たる観念によって生み出される眩暈めまいの感覚により、こうした混乱状態は完全なものとなった。この種の眩暈はともかく生殖器のなかに位置するのである。

の身体かくらんの攪乱状況は完成していた。この種のめまい感はどのみち生殖器に由来していた。

These are the merest physical symptoms. *They* can readily be sketched in words. But how to convey the rapture of the mind, as it mingles with the body, draws apart into itself, and mingles again, in a wild and yet graceful dance? The sense of being absolutely in the right and longed-for place is fixed and guaranteed by every ray in the universe. The beatific vision would be a similar experience if one also *was* what one saw. (Perhaps that is indeed the meaning of the beatific vision ?) Consciousness half swoons with its sense of humble delighted privilege while keen sight, in between the explosions of the stars, devours every detail of the real presence. I am here now, you are here now, we are here now. To see her among others, straying like a divine form among mortals, is to become faint with secret knowledge. There is also a gleeful calm as one realizes that these passing seconds are the fullest and most perfect, not even excluding sexual union, which can be allotted to human beings.

既存訳

これらは単なる肉体的徴候にすぎない。これだけなら容易に言葉で書き表すこともできる。しかし、精神が肉体と混じりあい、解きほぐれ、ふたたび混じりあいながら、烈しくも優雅なる踊りを踊るとき、そうした精神の忘我の境地はなんと表現したらいいのか？ 当を得た待望の場所に自分が絶対に位置しているという観念が、宇宙のあらゆる光によっ

試訳

以上は単に身体かくらんの兆候にすぎない。それは言葉によって速やかに描写できる。だが、心の恍惚感はいかにして伝えることができようか、精神は肉体と混ざり合っているから、精神を引き離しても、野放図だが優雅な踊りのうちに再び混ざり合ってしまうのではないだろうか。自分は絶対に正しい、そして切望していた処にいるという感覚は宇宙のあらゆる

て定着され、保証されるのである。もしも自分の目に見えるものが同じく自分であるとするなら至福直観〔聖徒が天国にて神をみること〕はこれと類似した経験でであろう。（ことによると、それこそ本当に至福直観の意味ではなかろうか？）謙虚で喜びに満ちた恩恵の観念によって意識が半ば茫然とする一方、星の炸裂の合間あいまに、鋭い視覚が現実の存在の一部始終をくまなく看取する。自分は今ここに、君は今ここ僕らは今ここにいるのだ。他の人々の間に立ち混じり、死を免れぬ人間の中を彷徨う神の姿^{さまよ}ながらの彼女を見るのは、隠れたる秘密を知って気が遠くなるのにも等しい。この過ぎゆく一秒一秒は、およそ人間に賦与される時間のうち、性的結合を含めてすら最も充実した完全な瞬間であり、このことを認識するとき、そこにはまた歓びに満ちた平穏があるのだ。

光によって固定され保証される。もし人が目にしたもののそのものであるとするなら、至福の直観とは私のこの経験に似たものであるだろう（おそらく至福の直観が意味するものは実際にそれなのではないだろうか）。星々の爆発の合間あいまに鋭い視力が、まことの存在のあらゆる細部をむさぼっている間、意識はつつましくも嬉しい特権の意識のうちに半ばぼーっと薄れていく。私は今ここにいる、君は今ここにいる、私たちは今ここにいる。人々の中に彼女を目にすること、神の姿に似た姿が人々の中をさまよ^{さまよ}うのを目にするのは、（ほかの人と共有しない）自分だけの認識で、気が遠くなるようなことである。過ぎゆく一刻一刻は、性的合体すら考慮から外さずとも、人間に割り当てられうる最も充実した完全な一刻一刻であるという意識のうちには歓びに満ちた静謐感がある。[‘with secret knowledge’ の knowledge を「知識」と訳すと意味が分からなくなる。この前後の意味は、ジュリアンが神のように見えるのであって、ほかの人にそう見えるわけではない。knowledge の元は動詞の know。know は「知る」とか「知っている」が原義だから secret knowledge の直訳は「（ジュリアンが神の姿のように見えるのを）密かに知っていること」となる。なる。このま

Part 2 翻訳について

までは分かりにくく「(他の人と共有しない) 自分だけの認識で」と訳した]

- 1 テキストはペンギン版(2004)を使用。テキストからの引用文の邦訳は阿部知二訳(岩波文庫 1975)、八木敏雄訳(岩波文庫 2007)、田中西二郎訳(新潮文庫 2005)を参考にさせて頂いた。

大学で受けた教育には、歳月を経て初めてその本当の意義が分かってくる類のものがある。大学四年の終了時、卒業論文を書くか、卒論に替える十二単位の試験を受けるか、の選択があり、筆者は後者を選んで、『ハムレット』、『白鯨』、『ハックルベリー・フィン』の三作品を十分な時間をかけて精読した。

これらの古典は英語の語彙や言い回しに深く浸透していて、また、英米の知識人の教養の形成に少なからず与っており、今にして思えば、精読した有難味がよく分かるのである。さらにまた、これらの書物は世の中の不条理をいくつも知ったり、逆境を何回か経験させられたりして初めて分かってくるものがある。

あの時代にこれらの書の選定に当たられた平井正穂、西川正身、青木雄造、小津次郎の諸先生(順不同)に自ずと感謝の気持ちを覚えるしだいである。

- 2 宮子あずさ, 本音のコラム: 殴られた医者の話. 東京新聞 .2023.5.29, 朝刊
- 3 斎藤美奈子, 本音のコラム: 命にかかわる法. 東京新聞 2023.6.14, 朝刊